
書 評・紹 介

石川義孝・井上孝・田原裕子編 『地域と人口からみる日本の姿』

古今書院, 2011年 3月, 126p

石川義孝編 『地図でみる日本の外国人』

ナカニシヤ出版, 2011年 4月, 73p

『地域と人口からみる日本の姿』は編者が「まえがき」で述べているように、“現代の日本にとって重要な問題となっている人口というトピックを、地理学的な観点からわかりやすく論じた教科書”である。本書が取り扱う範囲は極めて広く、包括的である。全国的な人口分布、出生と死亡、国内人口移動、国際人口移動と在留外国人、家族・世帯、性比と結婚、高齢者・高齢人口、大都市圏と地方圏、ライフコースと移動歴、GISの活用などのテーマが15章で構成されており、それらが120ページ程度に納められている。それぞれのテーマが単独で十分な重みをもつもので、これだけコンパクトにまとめる過程では編集上大変なご尽力があったと拝察される。本書は主に大学の学生向けに人口地理学の入門書として作成されたようであるが、それ以外の一般の読者にも興味をもって読まれる解説書とするため、テーマの選択や内容には十分な配慮がなされているように感じた。また、各章を担当する研究者の主張や俗説に対する賛否を含む見解などが垣間見られることから、教科書というよりは小論文集的な色彩も強く、それぞれの章を単独で読んでも有意義であると思われた。出生、死亡、人口移動といった各人口変動要因と人口分布の関係、男女別、コーホート別にみたライフコースを通じた移動のタイミングが地域人口に及ぼす定量的な効果、さらには地域別の世帯構成、とりわけ高齢者の生活への影響など、網羅的に概観できる。欲を言えば、地理学界が人口を題材として語る際、他分野には無いどのような切り口や特徴をもっているのかについて、もっと前面に押し出してもらった方が私のような門外漢には分かりやすかったような気がする。

本書とほぼ同時に刊行されたのが『地図でみる日本の外国人』である。こちらはタイトルの通り、わが国における外国人の地理的分布の特徴を、都道府県、市区町村別、ならびに特定都市においては町丁別にマッピングすることによってわかりやすく解説している。わが国の外国人に関する統計資料のうち地理情報がとれるのは、主として総務省統計局「国勢調査」、法務省「在留外国人統計」、厚生労働省統計情報部「人口動態統計」などに限られる。それらの情報を駆使して指標化し、それらをマッピングすることでさまざまな地域間の特徴的な違いが観測されている。ただし、外国人人口の規模は基本的に大都市圏で大きいことから、都道府県別の違いを観るだけでは新たに得られる知見に限りがある。そのため、外国人集住地域の状況に関しては、より詳細な地図を用いて分布等の特徴について解説がされており、それぞれケースについて大変興味深く拝見した。本書で取り上げられている外国人に関する様々な地理情報が今後も継続的に蓄積されることは、地理学界に留まらず非常に重要だと思われる。

(佐々井司)